

# アイメイクが眼の大きさ錯視量と顔の魅力度に与える影響について

甲斐 由里子

従来、アイメイクの錯視による眼の過大視効果や、顔の魅力についての研究がおこなわれてきた。本研究では、(1)アイメイク(アイシャドウ、アイライン・マスカラ)の強度の変化が眼の大きさ知覚と顔の魅力度に与える影響、(2)アイシャドウとアイライン・マスカラの効果が加算的であるかを検討することを目的に4つの実験を行った。

実験1では、アイシャドウが眼の大きさ知覚に与える影響について検討した。アイシャドウの濃さを系統的に操作した顔画像を標準刺激、化粧を施していない顔画像の眼の大きさを変化させた顔画像を比較刺激として、知覚される眼の大きさを測定した。その結果、アイシャドウを施していない眼よりも、アイシャドウを施した眼のほうが大きく知覚されたが、アイシャドウの濃度の変化によって知覚される眼の大きさに有意差はなかった。したがって、アイシャドウそのものに眼を過大視させる効果はあるが、比較的薄いアイシャドウでもほぼ最大値の錯視量を生じさせる可能性が考えられる。

実験2では、アイシャドウが顔の魅力度に与える影響について検討した。実験1の標準刺激の顔画像を使用して魅力度を測定した。その結果、低～中程度のアイシャドウを施した顔画像の魅力度はアイシャドウを施していない顔よりも高く判断されたのに対して、過度なアイシャドウを施した顔画像の魅力度は低く判断された。したがって、低～中程度のアイシャドウを施すと魅力度は高まるが、過度なアイシャドウは魅力度を低下させることが考えられる。

実験3では、アイシャドウとアイライン・マスカラが眼の大きさ知覚に与える影響が加算的であるかどうかについて検討した。実験1同様にアイシャドウとアイライン・マスカラを系統的に操作した顔画像を標準刺激、化粧を施していない顔画像の眼の大きさを変化させた顔画像を比較刺激として、知覚される眼の大きさを測定した。その結果、アイライン・マスカラ主効果は見られたが、アイシャドウの主効果は見られなかった。したがって、アイライン・マスカラを施した条件ではアイシャドウ単体の過大視効果が弱めることが考えられる。

実験4では、各アイメイクが顔の魅力度に与える影響とそれらが互いに影響しあうかどうかについて検討した。実験3で使用した標準刺激の魅力度を10段階評価で魅力度を測定した。その結果魅力度は、最大強度のアイシャドウを施した顔が、他のアイシャドウ条件に比べて低く、中程度のアイライン・マスカラを施した顔が、他のアイライン・マスカラ条件に比べて高かった。また、アイシャドウ強度がなし～中程度の条件において、中程度のアイライン・マスカラを施した顔はほかのアイライン・マスカラの強度の条件よりも魅力度が高く、アイライン・マスカラを施した条件において、最大強度のアイシャドウを施した顔はほかの強度のアイシャドウを施した顔よりも魅力度が低かった。したがって、実験2の結果に加え、なし～中程度のアイシャドウに中程度のアイライン・マスカラを施すとより魅力度を高められるが、アイライン・マスカラを施した眼に濃度の高すぎるアイシャドウを施すと魅力度が低下することが考えられる。

4つの実験を通して、各アイメイクの強度変化が眼を過大視させる効果や魅力度に与える影響について検討した。しかしこれらの実験は、顔画像にコンピュータ上で化粧を施した刺激画像を使用しており、参加者のデータを増やしたり、実際に化粧を施した顔を刺激画像としたりすることでより一般化された結果になることが考えられる。知覚される眼の大きさや魅力度を最大化するアイメイクの濃度を探る研究は人々の需要に応えられると思われる。(基礎心理学)